

秋の七草2種：藤袴と葛の香り

中村祥二（会長）

1 フジバカマ（藤袴）

Eupatorium japonicum Thunb.

絶滅危惧種のフジバカマの香り

フジバカマは秋の七草のひとつであり、香りの良いことで知られている。この香りは日本人が文化として知っておきたい香りである。

フジバカマの別名は蘭、蘭草、秋蘭、香蘭、王者香、国香、蘭澤、香水蘭、猗蘭、幽蘭、侍女花などと極めて多い。現代の中国では沢蘭と呼ぶ。古くは香りのよい植物を「蘭」と呼んだというから、文献だけを見ていたのではフジバカマと蘭とが混乱しやすいことがわかった。ただ、フジバカマの香りに似た蘭の香りはないといってよいから、香りから判断すれば、まず間違えることはない。

フジバカマはキク科フジバカマ属で、川岸近くの草地に自生する多年草である。しかし50才過ぎ頃まで本物を見たことがなかった。自宅のある横浜北部の早瀬川を源流までさかのぼってみてもそれらしいものは見当たらない。両岸をコンクリートで護岸してあるから無理なのだろう。人に聞いたりしてみても現在ではそう簡単に見つかるものではなく、最近では絶滅危惧種になったという。

数年ほど前の10月中旬に東京世田谷区の東京農業大学で念願のフジバカマを手に入れることができた。花が咲いているフジバカマの、刈りたてと乾燥する



中村会長 撮影

過程での香りの経過を追ってみた。花は茎の先に淡紅紫色を帯びた白の小さい筒状花を散房状につける。香りはサクラ餅、飼料用の干し草、クマリンが感じられた。強くはないが、ほのかに広がり漂う快い香りだ。日本人が好きそうな香りである。2週間ほど陰干しをしながら変化をみていると、新鮮さが減ってくると共に粉っぽい甘さが少し増し、そして落ち着いてくる。それ以上時間をおいても変わる様子はなかった。葉も似た香りがした。

文献によると、生薬にするには8～9月の、花が咲く前のつぼみがついた時に全草を採取し、2～3日、日干しにして、香りが出たら、風通しのよい場所で陰干しにして乾燥させる。生薬名は蘭草らんそうといい通経、解熱、鎮痛、浮腫に効果があり、水で煎じ服用する、とある。

その後、11月初旬、福岡市植物園を訪れる機会があった。「緑の情報館」でたずねたところ、園内の地図に印をつけて野草園にあるフジバカマの場所を教えてくれた。フジバカマはやはり特別な場所や植

物園でないとみられない植物になったようだ。日本の身の回りにあった伝統的な文化を楽しむのに、今ではそれなりの努力が必要なが分かった。

2 クズ (葛)

Pueraria lobata Ohwi

花の香りはファンタ・グレープ



森林総合研究所四国支所 提供

秋に花をつけるなじみ深い山野草にも香りを放つものがある。つる性の植物で野原や土手一面に広がるクズは、実は万葉の昔から秋の七草の一つである。初秋の頃、赤紫色の花を咲かせる。分け入って顔を近づけてみるとブドウの香りに似ている。ブドウでも種類が色々あるから、デラウェアか、巨峰かな、マスカットではないかと思いついていたうちにぴったりなものに行き着いた。清涼飲料のファンタ・グレープだった。甘さが強いし、発泡を想わせる清涼感も秘めている。自然の花の香りの面白さがある。

香料関係の少人数の集まりでこの話をしたところ、自分も知っている、ファンタ・グレープにそっくりだという人がすぐにあらわれた。内心、クズの花の香りはあまり知らないだろうと思っていたが、さにあらずで、専門家は身の回りのささいなものでも興味をもって嗅いでいるのを知って、感心したことが

ある。

クズの花の香り成分にはメチルアンスラニレートを感じる。オレンジ、レモン、ミカンなどの柑橘系の花にも存在するが、クズの花の方がはっきりと感じられる。この成分には鳥の忌避効果がある。子孫を残す役目の花は、花粉を媒介してくれる昆虫は大歓迎だが、鳥を近づけないためには香りの効果を巧みに使っているのかもしれない。

クズはマメ科の多年生つる性草本で茎は10メートル以上に伸び、繁殖力は旺盛である。近年北アメリカに帰化し、各地で大繁殖して有害雑草になっているそうだ。日本では堤防の土留めに利用されてきたといわれる。そういえば、鉄道の線路沿いの傾斜地に茂っているのをよく見かけるが、手入れが悪いのではなくて土留めの目的もあると考えれば理解できる。

根から良質のデンプンがとれる。血行不良・風邪・二日酔い・高血圧などへの効能があるとされるが精製が容易でなく、市場の葛根湯の商品にはバレイショやサツマイモの澱粉を含むものが多い。